

# 現代のことば



ひろせ こうじろう  
廣瀬 浩二郎

京都市役所 屋上 (夕刊)

1 7版

2023年(令和5年)5月23日 火曜日

京

市役所

屋上

(夕刊)

4月から福山雅治さんが全盲の捜査官を演じるテレビドラマ「ラストマン」が始まった。「こんながつこい視覚障害者なんていないぞ」と日々突っ込みを入れつつ、毎週の放送を楽しんでいる。福山さん演じる主人公は、「できないことは素直に認め、健常者のサポートを受けている点に好感が持てる。最新の通信技術をフル活用し、視覚的な情報を得る一方、嗅覚や聴覚を使して、健常者が見落として見過ごしがちな事實を「発見」する。弱さと強さの画面を持つヒーローがどんな難事件に挑むのか、引き続き注目したい。

全盲の捜査官の活躍をテレビでみながら、こんなことを考えた。障害者にとって、「健常者と同じことができる」と「健常者とは違う特性がある」のどちらが大切なのか。全盲の捜査官は機器や人的サポートにより「同」を可能としている。他方、捜査官に当たっては「違」の部分で強みを發揮する。同と違が無理なく融合している点がこのドラマのおもしろさといえるのもしない。

僕が初の全盲学生として京都大学に入学したのは1987年である。当時、多くのマスコミの取材を受けた。自分がことが書かれた記事を読んで、僕は違和感を抱いた。「過大評価」でも過小評価でもなく、等身大の障害者の姿を伝えてほしい」。青年期の僕は「同へのこだわりが強く、少し突っ張った。50歳を過ぎた今、僕は「違」を意識する機会が増え、「見えないから」とできるかと検索して

いる。とはいっても、視覚障害者は圧倒的なマイノリティーである。健常者に囲まれて暮りしているど、否応なく多数派に合わせなければならない場面も多い。同と違の間で揺れ動きながら生きているのが障害者の実像だろう。

先日、自宅のパソコンが急に動かなくなつた。パソコンが使えないだけで不安になる。この焦燥感は何なのか。障害者にとって、パソコンは単に生活を豊かにする道具ではない。僕が高校生の時、パソコンに音声装置をつけないで、初めて漢字かな文じり文を書いた。あれから40年。今では、健常者と同様なスピード、精度で全盲者が文書を作成できる。僕は日々大量のメールを処理しているが、やり取りする相手の割以上は点字を知らない健常者である。パソコンの普及によりバリアフリーが実現し、障害者の就労の可能性が広がつたのは間違いない。

パソコンは障害者にとって自立と社会参加のツールである。同を保障してくれる大事な機器が不調となると、障害者は健常者以上に恐怖を味わう。そう自分に言い聞かせてみると、何かしつくりしない。僕のパソコンが故障したのは、「ラストマン」の初回放送日だった。同じなかが違うのか、もう一度考えてみる。パソコンがなく、点字しか使えないからは不便だつたけど、そこにオリジナリティ一とバイタリティーの源泉がある。よくな気もする。全盲の捜査官のように、「違・同」の極端を自由に移動しよう。それにしても、かつていい福山さんに対し、パソコンの故障を原稿の締め切り通りの言い訳にする僕は、なんともかつて悪い。

(国立民族学博物館教授・文化人類学)